

けませんよ。そんなことをして、囲んで棒で叩かれてもしたら、折角の瓶は壊れるし、オバアサンにあげるものがなくなるからね。それから、オバアサンのお部屋に入ったら、まず、オハヨ！、を言うのを忘れずにね。入ると、いきなり、お部屋の中をきよろきよろ見回したりなんかしないでね」

「アツハイ、ベイビー・サブミツションです、ヨロコンデー！」と、赤頭巾Ⅱちゃんは、オカアサンにそう言って、ユビキリ・プロミスしたのだった。

やがてマイコ音声がネオサイタマ・ステイションへの到着を告げ、七〇両にも及ぶ実際貨物車両めいた新幹線のマケグミ・クラスにあたる車両がホーム端のエレクトリック磔トリイでケジメされた不正乗車者の焼きネギトロを通り越した頃、「ネオサイタマ・ステーションどうぞ」。マイコ音声が鳴り響く。

ナノカーボン・タタミの敷き詰められた屋根に搭載された重機関砲が警戒態勢を解くと、カチグミ・クラス車両の実際安全性の高い防弾ドアがキャバアーン！ と開き、赤頭巾Ⅱちゃんはネオサイタマのホームに降り立った。

ところで、オバアサンのおうちは、ネオサイタマの中心地からハーフストリート離れたバンブー林の中にあつた。赤頭巾Ⅱちゃんがバンブー林のほうへ歩き出すと、バイオ・オオカミが決断的速度で現れた。コワイ！

しかし、キョウト育ちの赤頭巾Ⅱちゃんは、ボックス・レイジヨウであったため、バイオ・スモトリの悪行については詳しいが、バイオ・オオカミがどんなにバッドなモンスターであるかを知らなかったのが、別段コワイと思わなかったのだ。

「ドーモ、赤頭巾Ⅱちゃん、バイオ・オオカミです」

「ドーモ、バイオ・オオカミⅡさん、赤頭巾です」

「たいそう早くから、どちらへ」

「オバアⅡさんのところへ行くのよ」

「エプロンの下を持つてるものは、なあに」

「高純度マグロ粉末と、バリキドリンク。オバアⅡさん、ご病気でよわっているでしょう。それでお見舞いにもってつてあげようと思って、昨日、おうちで用意したの。これでオバアⅡさん、しっかりなさるわ」

「オバアⅡさんのおうちはどこさ、赤頭巾Ⅱちゃん」

「これからまた、八、九ブロックも歩いてね、バンブー林の奥の奥で、スゴイタカイビルが三棟立っている下のおうちよ。おうちの周りに、胡桃のイケガキ・プラントがあるから、すぐわかるわ。」

赤頭巾Ⅱちゃんは、こう教えた。

バイオ・オオカミは心の中で考えていた。

「フレッシュな、やわらかそうな小娘。こいつはジューシーで、おいしそうだ。トシヨリよりは、ずつと味が良かろう。ついでに両方一緒に、ぼつくりやる工夫重点な」

そこでバイオ・オオカミは、しばらくの間、赤頭中Ⅱチャンと並んで歩きながら、道々こう話した。

「赤頭中Ⅱチャン、まあ、そこらじゅうに光っているネオンサインをごらん。なんだって、方々眺めて見ないんだろうな。ほら、ネコネコカワイイが、あんなにいい声で歌を歌っているのに、赤頭中Ⅱチャン、なんだかまるで聞いてないようだなあ。レイジヨウⅡスクールへ行くときのようにな、むやみに、サツバツと、奥ゆかしく歩いているんだなあ。外は、街の中はこんなに明るくてタノシイのに」

そういわれて、赤頭中Ⅱチャンは、仰向いてみた。すると、ネオンサインの光が、ビルとビルの立ち並ぶ隙間からもれて、これが、そこでもここでも、タノシイランドのように輝いていて、どのビルにもどのビルにも、きれいなカンバンがいっぱい並んでいるのが、目に入った。そこで、

「あたし、オバアⅡサマに、元気でいきおいのいいオーガニック・マグロを探して、オーガニック・スシをこしらえて、もってつてあげようや。するとオバアⅡサン、きつとお喜